【特集：橋本毅彦先生ご退職記念】

知の導き手としての教師

隠岐 さや香[1]

私にはいくつかの運命的な書物との出会いがあるのですが、その機会を与えて下さったのが橋本毅彦先生でした。

あれは確か 1998 年頃のことで、私は修士課程の一年生でした。当時、橋本先生が東大先端科学研究所で開催していた授業や研究会にたびたび参加していたのですが、私はそこで、自分が大きく影響を受けることになる二つの書物と出会ったのです。一つは、有名なミシェル・フーコー（Michel Foucault）の『言葉と物』（Les mots et les choses, 1966［邦訳 1974］）であり、もう一つは後にフランス留学したときに指導教官となって下さったエリック・ブリアン（Éric Brian）氏による『国家の計測』（La mesure de l'État, 1994）というフランス語の書物でした。

フーコーの『言葉と物』は邦訳もあり有名な著作でしたが、当時の日本における科学史の授業では必ずしも扱うとは限らない内容でした。それに対し、橋本先生はさり気なく講義の中でフーコーを読む時間を作って下さったに留まらず、フーコーの影響下にある英語圏での科学史研究の動向をも紹介して下さったのでした。私はそこで示される世界に瞬く間に魅了されました。

ブリアン氏による『国家の計測』については、更に思いがけない出会いであったように記憶しています。確かある日、ふと橋本先生が私を呼び止められて「隠岐さんはこの本、関心があるかもしれませんね」と勧めてくださったのです。それは、18 世紀のパリ王立科学アカデミーにおいて、ラプラス、コンドルセといった学者たちによる確率論研究と、行政官ミッショディエールによる初のフランス全土人口推計の試みとがいかにして出会ったのかを検討した書でした。フーコーの視点を取り入れつつ、制度史、数学史、文化史、思想史の一次資料を縦横無尽に読み解いていく内容は当時の私にとって難解でしたが、読

1　東京大学大学院教育学研究科教授。

み終えたとき何とも言えない達成感がありました。

この経験があって私はフランス留学で誰に師事したいのかを決めることが出来ました。橋本先生に導いて頂けなければ、私のフランス留学もそこから促される研究も大きく違うものとなっていたでしょう。ブリアン氏には当時のフランスに存在していた D.E.A という学位の指導をして頂き、その後も研究交流を続ける関係となりました。

なお、橋本先生は私がその十年後、2008 年に東京大学で博士論文を書き上げた際の指導教員でおられた方です。書物の紹介という迂遠なエピソードから始まるのを訝しく感じた方もおられるかもしれません。実はもともと、私は橋本先生の指導学生ではありませんでした。私が先生の指導下に入ったのは、フランス留学から帰国した 2004 年秋以降のことなのです。この時、私の本来の指導教員であった方が学生を指導できなくなりました。その詳細な説明は省きますが、それで私を含め、多くの学生が橋本先生のもとに移ったのです。突然学生が増えて、先生にはご負担が大きかったことと思います。

これは自身が博士論文を仕上げてから改めて気づいたことですが、教員も一人の研究者です。上記のような大変な経緯がありつつも、先生は 2000 年代から 2010 年代にかけて、『〈標準〉の哲学』（2002）をはじめとする技術標準の形成史、『描かれた技術　科学のかたち』（2008）のような技術と図像の問題、そして博士論文以来追求してこられた航空機開発の歴史研究『飛行機の誕生と空気力学の形成』（2012）など、幅広い領域での学術的な業績を多数発表されました。その傍らで、先生のご専門に近いとはいえない私のような学生を含め、数多くの学生に適切な助言を与えてこられたのです。そのことを思うと、知の導き手としての先生のお仕事ぶりにただ、圧倒されます。

ちなみに、この間に先生は放送大学における科学史教科書（後に『〈科学の発想〉をたずねて—自然哲学から現代科学まで』として左右社より出版）も執筆されています。同書は私が初めて科学史の授業を組み立てたとき、底本とさせていただきました。私は授業の組み立て方も先生から書物を通じて教わったことになります。

指導学生でなくなって以降は、科学史学会の欧文誌、*Historia Scientiarum* の

編集委員長としての橋本先生に接する機会が多くありました。海外の著者とのやり取りや、英文推敲のための助言の与え方、トラブルの時の対処法など、これについては、まだまだ教えて頂かなければならないことばかりです。

教師と学生の関係には様々な形があり、いずれもかけがえのない一回性を有するものです。それを知りつつも、敢えて「師弟関係にとって二十歳ほどの年齢差はちょうどよい」と私は思います。出会ったとき、教師の側は既に教育に熟練していながら未だ若く、学生の側が長きにわたり多くを受け取ることができるからです。

橋本先生からは、最初は時折助言を受ける「斜めの関係」で、その後は指導学生として、そして後には先輩の同業者として導いて頂きました。それはきっとこれからも変わりません。その上で、節目のこの機会に、ひとまずは心よりの感謝の気持ちを述べさせて頂きたいと思います。橋本先生、ありがとうございました。これからもよろしくお願い致します。